

落日の名残りは一條の黄ろい帯となつてばつと明るく空に連り、魂はもうこの世を去つた亡軀くわうの空しく懸つてゐる十字架が、その中にくつきりと黒く浮き出した。見る間に暗くなつてゆく黄昏どきを、たゞもう何といふ事もなく騒々しく押し合ひながら、群集は次第に仕置場を散じ始めた。丁度十字架の傍へ、屍に窺うかがひ寄る豹やまいぬの群のやうな、妙におどくした人影が現はれたとき、ヨセフは初めて席を立つた。恐しさと悲しさに外套を頭からすつぽり被つたまゝ、彼はたどくと歩みを運んだ。

穢らしくせゝつこましい町端れの通りにはもう燈火あかりが點いてゐたが、禿山の頂よりも此處の方が暗いやうな氣がした。腐敗したものゝ臭ひ、やうやく落着いて來た埃などのむつとばかり目鼻を襲ふ曲りくねつた横町、人家の陸屋根、庭、廣場、到るところ光と影とが騒がしく戯れてゐる中を、人々は忙しない様子であちこちしてゐた。薄暗い物蔭をふわくと動いてゐるかと思ふと、ぱつと燈火の明るい戸口に黒々と浮き出す。すぐ人垣を作るかと思へば、忽ち散りぢりに分れてしまふ。躍氣となつて身振り手真似をするもの、叫ぶもの、笑ふもの、罵るもの、

の、まるで喧嘩でもしてゐるやうである。何事もなし何事もなしといふ氣持ちがした。或る者は買ひ、或る者は賣る、ある者は何やらむしやく頼張り、或る者は接吻をし、そして或る者は取つ組合を始める。かうして年が年中やむ時のない市井の混雜をば、たゞの一瞬間でも妨げるものがあつたとは、どうしても信じられなかつた。

死んだやうな胸に絶望を抱きながら、ヨセフは邊りの物の眼に入らぬやうに外套を頭からすつぽり被つて、幾百萬かの靴底に磨り耗すりされた數石を歩いて行つた。悲しさ腹立たしさに彼は呼吸が塞まりさうであつた。世間の人々の愚かさ加減、慘たらしさ加減、眼の見えなさ加減！ 普通の人間なら恐しさと後悔の念とに氣も顛倒して大地に伏し、——神様どうぞお助け下さりませ……わたくし共は自分で自分のしたことが分らなかつたのでございます！ と叫ぶもすべきに、彼等は不思議なほど平然としてゐる。

豫言者の中の豫言者、人の中の人とも云ふべき偉人が無慘な仕置に處せられたのを何と思つてゐるのか、人々は夕餉をととのへ、女房と接吻し、貸金の拂ひが不足してゐると、葡萄畑に肥料こやしを入れ過ぎたとて、口穢く罵るのであつた。

僅かにちらりと閃いた灯は終に消えて、人間の心は黑白あやみも分かぬ暗の中に行きはも知らず取残された。愈々暗く愈々恐しい道を、神のみ旨に従つて、妻子家畜、さては殺しい家財などを

携へた人間の群は、業病に苦しみ、絶え間なき争ひに疲れながら、世紀から世紀へと小迷ひ續けなければならぬのだ。

世界は空虚くうこになつた。世界はまた元のやうに歡びもなければ意味もない、丁度道端の泥淤どろに委せられた死骸同然なものになり果てた。それだのに人々は聲高に喚きながら煙の漲つた横町を事もなげに往來し、温氣の濛々としてゐる甕のあたりを忙しさうに立ち働はたらき、笑ひ、罵り、泣き、接吻してゐるではないか。

嫌惡の情にヨセフは胸を挫めつけられる思ひがした。この埒もない愚かな蟲けら同然の人達を眼に入れぬために、外套を眼までかぶせ、一人低く頭かぶを垂れて、ヨセフは廣場をよぎり、市場を通り抜け、町から町へと急いだ。民家、巍然として黒く聳ゆる神殿、埃をかぶつて白いサイブレスの並木、羅馬式宮殿の美しく整つた柱列などが、次々と傍を掠めて行つた。

ヨセフは走るやうにして歩いた。其の後を瘠せひよろけた影法師が敷石の上で伸びたり曲んだりしながら蹤いて來る。青い大理石を思はせる寒さうな夜空には、利鎌の形をした細い月が、かの永久に解く事の出來ぬ謎のやうな憂ひを含んで、痛ましくも又不思議な光を放つてゐる。

とある廣場であつた、騒しい足音につれて霧のやうな月光に黒く見える一群の人が現はれた。口々に何やら叫んだり罵つたりしながらヨセフの前を走り過ぎたが、見る間に暗い横町や路次

に散り失せてしまつた。物蔭に潜んで様子を窺つてゐたヨセフが未だ何事と判断する暇もなく、再び廣場の一角に重々しいしかも規則正しい歩調が聞えたかと思ふと、月の光に劍や楯を鈍く輝かせながら、ローマ兵の一隊が雷霆のごとく大地を震動させて馳け抜けた。群集を追ひつめ追ひ散らさうといふのだ。

これだけの事は、まるで死んだやうな月光の中に映じた幻の如く、ちらりと眼を掠めて消えてしまつたが、ヨセフにはちやんと合點が行つた。幾人もないイエスの味方が追ひ散らされてゐるのだ。晝間は、この人達が捕はれの師を奪ひ返さうと企てゝゐるなどと、今となつては滑稽なことながら、さも恐しさうに噂してゐたものである。

弟子達のこの企ては實行されなかつた。そればかりかピラトの宮殿の前に集つて、不平を訴へようといふ目論見も晝餅に歸した。心構への出來てゐない無力で臆病な弟子達は、鐵で鍛へたやうな兵士の壓迫に一堪りもなく、路次の奥や果物島の蔭に身を隠してしまつた。そして低い聲で自分達の受けた打身や掠り傷は、決して無駄になるまいなど、囁きながら、互ひに慰め合ふのであつた。

この惨めな努力が結局何の結果も齎さぬといふことは、賢いヨセフの頭に初めからよく分つてゐた。自分達には力が足りない。一度び鋼鐵の雪崩に襲はれたら、自分達は地球の上から姿

を消さなければならぬ、運がよくてたゞの自滅だ。かう考へてゐたヨセフは今朝ほど自分の家を集つた多くの人々に向つて、次のやうに云つたものである。

—そんなことは無分別な大人氣ない舉動だ。諸君は命を棄てなければならぬが、その死は考へのない畜生の最後同様、何の役にも立ちほしめない！……劍を取つて立つものは劍によつて命を失ふのだ。それより各々自分の家へ歸つて、世間の人々が心の底から眞理を悟るまでは、隱密にイエスの言葉をお擴めなさい。やがて劍も鞘に斂まり、光明が世を照らす時が來よう。

これはわしが眞底から諸君に申すことだ！

人々は今となつて後退するヨセフの臆病を責めたけれど、彼は己れの言葉の正しく賢いことを知つてゐるので、敢へて云ひ争はうともしなかつた。

しかし不思議にも、ヨセフは同時にかうした思慮のない烏合の衆がもつと大勢あつて、もつと物凄さを孕んでゐて欲しい、一揆でも起つて血腥い風が吹いてくれよかしと云ふ氣がするのであつた。丁度どこも知れぬ心の奥でこんなことを望んでゐるやうに思はれる。——イエスの死刑を平然として眺めてゐた世間の奴等を、多くの哀れな弟子達の慘殺で驚愕させてやりたい。さうすれば『眞理』と顔を突き合してびくともせず立つたかのピラトも、わが宮殿の柱列の下に集つてゐる僅少の人達を見たならば、其時は初めて自らなした罪の恐しさを思ひ知る

であらう。

何事もあるまい、かの冷かな羅馬びとの心がびりとも動くことはあるまいし、群集は一揉みに揉み潰されて追ひ散らされるに決つてゐる、とかうヨセフは信じて疑はなかつたが、それでも其の日一日氣がそはくして落着かず、表通りを覗いて見たり、屋根に出て見たりして、もしや群集の物凄い咆哮でも聞えはせぬかと耳を澄した。のみならず多くの下男に命じて諸所の廣場へ様子を見にやりさへした。

彼は長いこと物蔭に潜みながら、埃と月光とで白く見えるがらんとした廣場のさまを外套の下から眺めてゐた。力ない憤懣に胸が震へる。やがて、再び力づくよく大地を揺がせながら、羅馬兵の新しい一隊が近寄る氣配に、ヨセフは漸く手近の横町にあたふたと駈け込んだ。一時も早くわが家の庭へ逃れ入つて、サイプレスの薫り床しい樹蔭に、誰の眼にも觸れぬやう身を隠したかつた。恐怖は彼を家路へ狩り立てた。外に居ればこそ人波に揉まれる哀れな粟粒同然の身であるが、家へ歸れば多くの人を心の儘に動かす主人であり、様々な果物を賣らせる豊かな土地の持主である。

あゝ、出來ることならあの食ひ肥つた貴族共や、骨の長い狡猾な長老共や、もり上がる程逞しく筋肉が發達して鐵の鎧で身を固めてゐる兵士どもを、骨も肉も血も一緒くたに搗き交せて、

難炊か何かのやうにしてやりたい。自分は力のない弱い者だといふ、はつきり意識の形を取らぬ息づまるやうな感じがむらむらと込み上げて、時を得顔に威勢を振つてゐる者共が憎くて憎くて堪らず、暫しはイエスの死んだことをも忘れたかのやうであつた。

やつと廣場の埃で白くなつた足をそゞぎ、人波に揉まれて皺だらけになつた衣を着替へて屋根に出て、わが家の安全といふ快さをしみじみ味ひながら、月の吐き出す冷い霜の纏りついてゐる黒い庭、白い屋根と、果しもなく續く都會の海を瞰下した時、ヨセフは前よりも更に痛切に、此度人類の受けた損害が如何に大きなものであるかを感じた。

静寂は世界を領してゐる。量り知れぬ程高い空には星屑が無言と不動のまゝに燦き、粉を撒いたやうな銀河を越してまだ一入高く遠い彼方には、永遠無限の闇が更に不可思議な姿を横へてゐる。

大地はその懐ろに庭や、屋根や、遙かに續く傾斜のゆるい山々や、茫漠とした物の輪廓を抱いたまゝ、静まり返つて横はつてゐる。恐らくまだ止む筈のない狭い町々の雑踏は、見えも聞えもしなかつた。何も彼もが己れの生の尊さを自覺して、壯嚴な安息の境に入つたのかと怪しまれる。

けれどヨセフは、廣い宇宙に自分といふ小さな人間がたつた一人、おどおどと震へ止まない

胸に、聲にも立てられぬ絶望の情を抱いて、眞暗な庭に面した屋根の端に立ちながら、見、聞き、感じてゐるやうな氣がした。これは恐しいことであつたが、その恐しさの中には一脈の自負の心も動いてゐた。

ヨセフはたゞ一人かく感じ、かく思念するのであつた。

磔刑に處せられた偉人の顔は、浮動する闇の中から深淵の一端に現れ、震へながら夜の中に漂つてゐた。何處ともなくその静かな聲まで聞えるやうに思はれた。ある時は愛に満ちた優しい聲、或時は責むるが如き怒りの聲、または或時は云ひやうもなく悲しき聲——眞摯にして靈感に溢れた、かの大豫言者の聲である。思はず敬虔の念に打たれたヨセフは、この大聖の言行ほどんな些細のものでも一つ残さず想ひ起さうと努めた。想ひ出したことを大切に、まるで寶石の碎片でも拾ふやうにして、記憶の底に納めながら、自分の胸はかうした尊い物を籠めるに足る立派なものであると考へた。かく追憶に耽りながら、ヨセフは聲なき夜の闇に浮んでゐる幻の像すがたに向つて、言葉に出さぬ叫びを上げたのである。

——おゝ、ラビ！ 私わたくしはようくあなたが分りました。私はあなたを愛して居ります……あなたのお志、あなたのお教へ、何も彼も私にお託しなされたのは、決してお眼識めがねちがひではございません。あなたのお言葉は私がこの胸に守り立て、彼の世に旅立つときが来たならば、

あなたの記憶の亡びぬやうに、子孫に傳へ遺すでございませう。私の心の中が血を吐くやうな悲しみで張り裂けるばかりなのは、あなたのお眼に見えてをりませう！ これほどまでにあなたを愛するものが他に又とありませんか！ ラビ、ラビ！ どうしてあなたはむざ／＼敵の手に我とわが身をお渡しなさいました、どうして尊いお體を八つ裂きにするやうな盲目の輩をば避け隠れようとはなさいませんでした……お、ラビ！

烈しい堪へ難いばかりの感動はヨセフの全幅を領した。ヨセフは陸屋根の端に立つて、見るともなしに遙けく光る星を見てみた。心の中に何かしら大きなものが頭を擡上げ始めたと思ふと、見るみるそれが生長して、危かしく揺れる高い處へ彼を連れて昇つて行く。そこには恐しい功業の豫感が殆んど一面に充ち満ちてゐるのだ。時をり歸間的に、何處かの廣場へ馳けつけて民衆の群に投じ、歡喜と怒りの聲を高らかに張り上げて、

——わしもイエスの一味ぢや！……わしも磔はりつけにしてくれ、殺してくれ！ と叫びたいやうな氣がした。

眼の前にはもう人波の逆巻く廣場や、言葉に焔を點じられた群衆の凄じい喚聲などが浮んで來た。と、人波の上に高々と旗か何からしいものが、ぱつと明るく眼に映じた。ヨセフは大勢の者に脚上げされてゐるやうな思ひがした。群衆の潮に乗じて氣負ひ立つた彼は、一步も假借

せぬ判官の心持で宮殿に向つた。すると食ひ肥つた傲慢殘酷な人々が、恐れ惑つて宥しを乞ひながら宮殿を棄て、四方八方へ逃げてゆく。

ヨセフはいつしか心恍惚となつた。群衆のどよめき、敵の悲鳴、暴動の凄じいはた／＼めき、血、神殿の崩れる響、香の煙りが雲の如く覆いてゐる、イエスの光榮のために建てられた新しい寺の壯嚴さ、——これ等のもの、<sup>ひま</sup>間々に、穩かなしかも摩訶不思議なキリストの兩眼が、好き管長を得たりと云つたやうな嬉しさを見せて、應揚に自分の方を眺めてゐる。

しかし幸福と得意さまで心臓も張り裂けさうになつてゐたヨセフは、突然總身に冷水を浴びせられた思ひがした。鐵の如き羅馬兵の一隊が限の前に立ち塞つてゐるのだ。意久地のない臆病者の群は遠てふためいて逃げ出した。容赦のない手が一時にヨセフの方に差し延べられて、腮髯を鷲掴みにし、否應なしに埃や泥の中を引き摺つて、牢屋に抛り込んで了つた。そこにあるものは闇と拷問の責苦、一物の蔽ひもない體を打つ苔の痛みに、蛇のやうにのた打ち廻るのを、人々は面白さうに眺めて嘲笑ふのだ。そして終に……<sup>いまは</sup>臨終の際の苦しみに歪んだ、目も當てられぬ程に傷だらけなその死骸は、忌はしい十字架に張りつけられたまゝ地上高く掲げられ、殘忍で盲目な愚民共の惡罵と嘲笑の的となる……

ヨセフの胸は萎え縮み、手足はふる／＼震へて、眼は裏切者のやうな夜の闇を凝視するのであ

つた。

——いや、わしは豫言者ではない！——痛ましい悩みを懐きつゝヨセフはかう獨言ちた。——それに、わしが死んだからとてそれが何の役に立たう……いきなり古い神殿を打ち毀つて、三日の中に新しい寺を興さうなどと怪出來ない相談だ！ たゞ瓦礫の中に屍を曝すばかりで、それは神様に對して無分別な所行と云ふものだ。新しき種を播くべき土地を用心ぶかく耕すが專一で、新しき酒を古き革囊に盛らんが爲めには一滴一滴の辛抱が肝腎だ。イエスの御名は何時か世に布くこともあらう……血氣にはやる若者は死の懷ろへ飛び込みたがるが、思慮ある士は叡智の道を歩んで行くものだ！

## 二

誰やらせか／＼と石の階段を上つて來るものがある。サンダルの音と、はあ／＼と云ふ忙しない息遣ひとがヨセフの耳に入つた。ぎくりとなつて入口の方へ眼を轉ずると、薄暗の中に弟のヤコブの姿が見分けられた。

ヤコブは埃まみれの蒼い顔してゐる。自慢の髯に圍まれたその顔には、血走つた眼が爛々として輝いてゐる。彼は呼吸を切らせながら昂奮のあまり身を震はせてみたので、そのために美しく渦卷いた髯までが風もないのに戦いでゐる。陸屋根に足を踏み込むか踏み込まないかに、いきなり、

——ヨセフ！——と彼は嗷鳴つた。——あなたはそんなところで一體何をしてゐるんです。イエス様のお體は十字架から下すことを赦されぬばかりか、愚民の慰みに三日間晒し者にすると云つてゐるのに……私は大僧正のところへ行つてお願いしたが、イエスを葬ることは、私にしる誰にしる赦してくれないんです……イエス様のお體は大道の塵の中に抛り出されて、野良犬共がお骨をてん／＼ばら／＼に持つて行つてしまふ！ それなのに兄さんはそんな所にぼんやり突つ立つて、たゞくよ／＼してばかりゐるんですからね……あれ程イエス様に可愛がつて頂いてゐた兄さんが！

ヤコブは如何にも腹立たしげに物凄しい勢ひで両手を振り廻しながら叫んだ。けれど二人の兄弟を幼い時から一體の如く結びつけてゐる優しい愛と尊敬とは、その聲の中に響いてゐた。これも畢竟ヨセフの立派な心情には不似合な、一時の心弱さであることはヤコブも承知してゐた。弟の譴責に度を失つたヨセフは途方にくれて、面目なげに頭を垂れた。未だイエスの野邊送りも果てぬ中に、どうして心弱さに身を任せ悲歎の涙にくれてゐられたのか……これこそ何

よりも先きにせねばならぬ大切なことではないか！……直ぐにも駈けつけて頼まねばならぬ、いや要求せねばならぬ！……自分は空しく悲哀の重荷に頹折れてゐたのだ。自分が女々しく泣いたり啣つたりしてゐるひまに、既になすべき義務を立派に果して来た弟のヤコブを、ヨセフは愛情と尊敬の満ちた瞳で打ち眺めるのであつた。

すると何物か突如として、ヨセフの意氣消沈した心を照すものがあつた。實現されることのない空想は悉く消え失せて、心の空虚は容易く達し得られる美しい可能なものに満たされて来た。

氣力を恢復しようとするやうに彼は暫く無言でゐたが、さながら廣く明るい坦々たる道を汲見したやうな調子でさも嬉しげに叫んだ。

——さあ行かう！……イエス様に對する我々の第一の務めだ！……仇かたきや下手人どもにイエス様のお體を弄りものにさせてならうか。その上に、師を見棄てたといふ後の譏りも受けはならぬ！

かう云つて晴ればれとした斷乎たる顔を弟の方へ向けて、あたかも權威を持てる人のやうに嚴めしい聲音で尋ねた。

——弟子たちは何處にゐる？

ヤコブははたと當惑して、肩を竦め兩手を擯げた。昂奮は通り過ぎて了つた。今はもう何も彼も兄に押しつけて、それで自分の義務を果たした氣になつてゐる。アンナのところからカヤファのもと、それからそれと方々へ走り廻つて、全身の精力を消耗し盡したかのやうに、今では生れつきの氣重さに打ち負かされてしまつてゐるのだ。

——ヨハネは聖母マリヤ様と一緒に十字架の傍に居りました。ほかの者はもうイエス様が死の中で武卒共の細目におかゝりなされた時、みんないち早く散りぢりに逃げ失せて、誰一人彼等を見受けたものはありません。

——さうか？——とヨセフは苦々しげに問ひ返した。——したが東の年寄たちはどうした。彼等はイエスを愛してをつたのだが。してまたベテレヘムのオツシヤか、この町のニコデマスかに會はなかつたか。

ヤコブは兩手をふつた。

——え、臍甲斐ない腰抜け奴ら！——とヨセフは憤然として一喝した。——あのやうな者共を信じておいでなされたのか！……あのやうな下司面をようまあ我慢して見ておいでになつたものだ……よいわ、腰抜けは自分らの腰抜けぶりを祝ふがよい！……我々はちきちき代官ピラトのところへ行つて、民衆の間に動搖を起させぬやうに頼んで來よう。ピラトは賢い男で、ユ

ダヤに起つた宗教上のいざこざも、彼にとつてはいはゞ他人事ひとこと、教養のある人間であつてみれば、心からあの臆病な豺狼に同情することはあるまいて！

ヤコブはもち／＼した。彼はあの冷酷な羅馬人が恐しかつた、鐵のやうに鍛へ上げられた兵士や、單なる嫌疑のために聲望ある市の名士が幾人となく投ぜられた牢獄が恐しかつた。彼は思ひ切りの悪い調子で云ひ出した。

——しかしあのピラトは、ガリラヤ人の血も、その犠牲の血も無差別に流すほどの男だから、果して彼が……。

けれど自分の發見した功業の美しさに眼の眩んだヨセフは、なんのピラトが如何に非道な奴であらうとも、我々ほどの名士に指一本たりとも得さすまい、と心の中に多寡たかを括りながら、非難するやうな眼付で弟を眺めた。

——お前は怖いのか。——と彼はゆつくりと訊ねた。

ヤコブは羞恥の重荷に壓されて思はず頭を下げ、どきまぎした様子で美しい腮おとがの髯を撫で始めた。

——そんならよい、わしが一人で行く！——相手の答へをちやんと心に豫想しながら、ヨセフはかう云つた。

——私も一緒に乗ります！——と勢ひ込んでヤコブは起ち上つた。その聲にはもはや臆病の影さへなかつた。尻馬に乗るのが癖になつてゐたからで。

兄らしい優しさを以つてヨセフは弟を眺めた。

### 三

燻んだ色合で様々の怪物を織り出した毛織の帷の隙間から、さも奥深げな大廣間が見え、天井の下に吊られた黄金の網から靜かに落ちて來る花で一面に飾られてゐる。蠟燭を四本づゝ附けた足の高い燭臺の灯は黄色に揺れて、たゞ一面にオレンジ色した光の海と見ゆる中を、輕々と雲のやうに吹きなびく絹を纏うた、半裸の踊子が舞ひ狂つてゐる。

生ぬるい夜の微風が帷を揺がして、時をり東の間何も彼もが甘い幻のやうに消え失せる。ただタムブーラ(一種の絃楽器)やギリシヤ琴の音、肉感的な笛のすゝり泣き、杯のかち合ふ響、酔ひ潰れた人の喚き聲、烈しい舞踊の手につれてさつと遠ざかる輕い足音などが耳に入るばかりであつた。

ヨセフと弟ヤコブとは、色さまざまな方形の大理石に疊まれた華美な廣間には似ても似つか



ぬ、重苦しい、粗野な、穢らしい斑點のやうに並んで坐つてゐた。どす黒い悲しみに閉ざれてゐる二人の兄弟は、生の樂しさに酔ひしれてゐるやうなこの美しい世界とは何の由縁もない他人同志、いな敵同志であつた。

天井を四角に抜いた穴からは、謎のやうな夜空が覗いてゐたが、まだ同じやうに暗く底深いその影は、丁度真下に造られた水槽に沈んでゐる。緑色の御影石と、白い大理石と、暗い黄金との色調は、不思議な諧和をなして四方の壁に纏れてゐる。薔薇色の大理石柱が整然と列をなして天井を支へてゐる向うはすぐ庭で、香くはしい夜の闇が見透かされる。暗い木立のひまひまから月光に白く浮き出て見えるのは、大理石で刻んだ女神の死んだやうな眼、しなやかにくねつた股、招くが如き手、不斷の甘い倦怠に柔かく盛り上つた乳房である。

いかめしい、段鼻をした、淺黒い、髯むくぢやらなアリマタヤの兄弟の顔は、悲しさと心の張りで焼きつくやうに光るその眼や、握り締めた拳や、肩のあたりが石のやうにしやちこばつた色合の燻んだ着物などと一緒になつて、數奇を凝らした、輕薄な、情慾の香に充ちたこの美しさに暗い陰をつけてゐた。で、帷の妖怪や女神の白い眼までが、さもさも吃驚したやうにこの奇妙な闖入者を眺め入るかのやうであつた。

輪奐の美、錦欄や大理石の豪華、輕ろげな踊子の足音、あこがれ心に堪へ兼ねて絶え入るば

かり泣き叫ぶかと疑はれる糸竹の音、さては黒ずんだ帷の隙からちら／＼見える裸美人の姿、これらのものを見聞きするにつけ、七情の抑制を説くイエスの言葉とかうした生活との距たりの夥しさ、ひいてはそのキリストの爲めにわざ／＼此處まで足を運んだ心盡しの覺束なさまでが思ひ合はされて、二人は暗然たる氣持になつた。かの大理石の彫像と大差ないピラトの頭腦では所詮自分たちの氣持は分るまい、この世ならぬ壯美の眞諦を會得することが出來ないで、一言のもとに自分達の力ない臆病な歎願を斥けるに相違ない。

と、思ひがけなく胡弓の音ははたと歇んで、しばしかるやかな踊子達の足音も次第に遠ざかつて靜まり返つた。笛は一際高く絹を裂くやうな叫びを上げたと思ふと、びつたり途切れて了つた。やがて誰とも知れず思ひ上つたやうな聲が高々と響き渡つて、落着きのあるしつかりした足取が聞え出した。くろんぼの奴隷が身を屈めて、妖怪豎の帷を押し開くと、隅々に配置された四つの燭臺の灯火は、煽りを食つて吃驚したやうに身震ひした。

ピラトが入つて來たのだ。

二歩ばかり前に進むとそれなり立ち止つて、白い筋肉の發達した足に穿つた固いサンダルの底で、大理石の床をしつかり踏まへた。寬上衣は肉付のいゝ兩肩にふわりとかゝり、美しく剃り上げた顔はそつけなく二人を眺めた。

——これはこれは、ようこそお越しなされた。して御用向きは？——かうゆる／＼と無造作な聲で云ひ出した。

この權勢に驕つた、縁も由縁もない人間に對する煮え返るやうな憎惡の念が、同時に氣障れのしたやうな影を伴つて、ヨセフの心を掻き捲るのであつた。この瞬間ほど彼が自分の無力の淺猿しさと、怖しさを感じた事はなかつた。自己といふ氷の如く冷たい大理石の中に閉ぢ籠つたこの男に向つては、イエスと雖も恐らく云ふ所を知らなかつたであらう！

迂闊に口を迂らしては、双肩に擔つた悲しい使命を仕損じまいものでもない。でヨセフは自分によりつたけの注意力を助太刀にして、一生懸命聲のふるへを押し静めながら、やをら前に進み出た。威容備はつたこのエピクロス信徒の前にちよこなんと立つたヨセフの姿は、まるで白日の下なる影法師のやうに、見すばらしくぢぢむさいものであつた。

——代官様にはご機嫌如何でございます……——と彼は切り出した。——世にも悲しい仔細がございまして、お目通りへ推參いたしました……

——まづ承りませう。——と相變らず應揚な調子でピラトは繰り返した。

ヨセフはちよつと口を噤んだ。胸の中には激しい叫喚が嵐のやうに荒れ狂つてゐたのだが、分別を擲つて注意に注意を重ねながら、あれかこれかと言葉の選擇に迷つた。何者かゞ激越し

た聲で様々の亂暴な言葉を教へてくれるが、ヨセフはその燃ゆるが如き言葉を聞くまいと心の耳に蓋をしながら、たゞ上手な狡い云ひ廻しを考へ付くことに苦心した。

——代官様、あなたとしては我々の宗教上の争ひなど何んの關はりもないことでございますから、この事について公平無私な判断をお下しなさる事と存じます。……御承知でもございませうが、今日あのガリラヤ人イエスが磔の刑に處せられました。元來ユダヤの掟によりますと、明朝陽の上るまでに亡骸を十字架より取り下ろすべきでございます。ところが彼の處刑を求めた敵方のものは、三日の間巷の晒しものにして死骸を辱しめ、愚民どもの嘲罵の的にすると申して承知いたしません。我々一同そのやうな侮辱行爲の無益さを思ひ、その中に潜む悪心を見抜くものは、憤慨に堪へぬ次第でございます……

羅馬の代官ピラトは冷やかな無關心の態度でヨセフの言葉を聴き終つた。石のやうに固い腮をして、人を小馬鹿にしたやうに下唇を突き出した横柄な顔を見たばかりでは、内心果して何を考へてゐるか少しも分らない。平生齒牙にもかけぬぢぢむさいユダヤ人が二人まで、内心の葛藤に身を震はしながら、自分の前に立つてゐるその目的を、彼は果して推察してゐるのであらうか。

——亡きイエスに辱しめられた坊主共は、祖先傳來の儀式に従つて彼の遺骸を葬つてはなら

ぬと云ひ張つてをります。——昂奮して身振りまで混ぜながらヨセフは語を續けた。——私共がお目通りに推参いたしましたのは、正義に與する明智の代官様にお紐り申して、死屍に鞭うつ輩の手を止めたいばかりでございます。

ピラトは、『そんなことは俺の知つたことではないわ。』と云つたやうに、軽く眉を吊り上げた。——しかし、何故またお二人に限つてその願ひに來られたか……やつぱり彼の一味でも？

さういふ聲には何かしら狡猾な、底氣味の悪いものが潜んでゐるやうに思はれた。

ヨセフは慄へ上つた。諸所の持庭、白聖の家、そしてまた町の廣場に出ても、寺に行つても、家に居ても、あらゆる人から受け馴れて來た尊敬——それらのものが一時に記憶の底から浮び出た。と同時に恐しい幻かとはばかり、眞黒な十字架の遙かに聳えてゐるのが眼の前を閃き過ぎた。彼は答へた。

——決して左様なことは……

——ではどういふお知合かな。——とピラトは新しい問を發した、又してもその眼の中には狡猾な残忍な影が閃いた。

ヤコブは兄の奇智に感服して了つた。ヨセフは巧みに相手の切尖を録して、

——民間で餘りに仰々しくその名を持って囃しますので。——と答へた。

——わしはお二人の名前をよう存じてをります。——暫く無言でゐたピラトはかう云つた。

——お二人がこの町でも人に敬まはれる立派な方々なのはわしも承知してをる。一體お二人のやうな方と、あの薄汚い下民共の傳導者と、廣場や市場の埃にまみれて豫言とやらをしてゐた男と、どんな共通點があるのか合點が行かぬ。お二人は羅馬さへ羨ましい程の立派な苑や、多くの奴隸の培ふ見事な葡萄園や、その他畜類市場、兩替場など、數限りなく所持の筈だ。そればかりか、此の地の羅馬兵の武裝費として、莫大な利息の下に金を貸付けてをらるゝことも存じてをる。云ふまでもなくこれは羅馬の爲にも、又お二人の生れた土地の爲めにも結構なことに相違ない。またお二人が町の寺の修理にいろ／＼骨折りをなされたことも、わしは承知してをる……その通りですか？

——左様でございます。——とヨセフは容體ぶつた聲で答へた。

——左様でございます。——得々として弟のヤコブは應じた。

——よく承知してをります。——まるで二人の返答なぞに必要なないといふことを強調するやうに、ピラトはそつげなくかう繰り返した。——さうしてあの磔刑になつたガリラヤ人の教へも耳にしてをる。しかとした根據は覺東ないが、風の異つた哲學としてみれば中々面白いも

のだ。その教への主意と云ふは、富めるものはその富を貧しきものに分ち、あらゆる人間は見、るも汚はしい奴隷共さへけぢめなく、はらから同様に愛し、悪しきものにも双向はず、祖國に急ある時にも劍を抜かず、奢侈歡樂に遠ざかり、神殿祭壇をよそにして神を崇めることであらう。また當のイエスも穿くものさへない非人乞食であり、真正正銘の賤民共の豫言者であつて、村から村へ渡り歩き、人の施物に露命をつないだこともわしは知つてをるが、確かに左様かな。

——はい、確かに左様でございます。——と答へたヨセフの聲は震へた。

ピラトの冷やかな眼の中に輕蔑したやうな疑ひの色が浮んだ。

——わしはあのガリラヤ人の教へをすつかり調べてみたが、この教義は當の創始者の人格同様、まことに驚くべきものだ。かりそめにも生ある人間に生の悦びを捨てよなどといふ教へを、どうして世に擴めようとするのやら？……馬鹿げた話だ。この世は美しい、その美しい世界に人は神々の思召して主となつてをる。だから己れの喜びを神々の悦びとするために、なみくと注いだ歡樂の酒杯を底まで干すのが人間の務めではあるまいか。あゝあ、笑ひも知らねば美といふものも知らず、藝術の神々しさも、女の肌の柔かさも辨へなかつたあの乞食哲學者が、どうしてあゝいふ事を考へついたか合點が行かぬ。ところで、人は平等であるといふ彼の教へは、社會を危くするものだ。かういふわけで、神々にも人間にも危険な教へを二葉の中に刈り

取るため、わしはわざと宣告に調印したのだ。わしは坊主といふ奴が大嫌ひだから、坊主共の仕組んだ事は、市民として哲學者としてあるまじき奸計に相違ないと一目で睨んだのだ。イエスの教へは根本的にわしの心に反するものだが、人格としては如何にも優れた氣品と宏大な精神をもつた人間であるといふ印象を興へられた。心事を了解するには苦しむが、とにかく感嘆の外はない。わしは放免してやらうかとさへ思つたのだが、彼自身生を受け入れなかつたのだ。あれは偉大なストイックの行者であつた。したがお二人は……彼の何に當りますな、してまた彼はお二人の何に當りませうかな？

ヨセフは答へなかつた。この狡猾で圓轉滑脱な羅馬人の言葉に、何かしら深い侮辱の含まれてゐることが臆げながら感じられたのである。

——これはわしの思ひ違ひであらうも知れぬが、——と今度は別な狡猾さを以てピラトは云ひ出した。——お二人はイエスの心服者で、あの教へを實生活に適用するお心算かな？ やはり同様に政府の倒壊を望み、民衆が禁慾を旨とする暗いイエスの信仰の中に更生することを希望せられるかな？ またお二人も同様この世の富も歡樂も抛つて、かのイエスに倣つて、大道で奴隷や非人の宗教を擴めるお心算かな？ 恐らくそんなことでせうな？

ヤコブは又しても兄の頓智と要領深さに驚いた。上の上をゆく狡猾さを以てヨセフはかう答

へた。

——左様なことはございませぬ。イエスの教へは到底この世と相容れぬものでございます。私共はあなた同様にあの宏大な精神力に感嘆するものでございます。

ピラトは相手の腹の底を探らうとするやうに、長い間ちつとヨセフの顔を凝視めてゐた。

——あゝ左様か、それならわしの考へ違ひだつたのだな？ イエスはわしに縁故のないのと同様、お二人にとつても一介の路傍の人なのだな？

——人の中の人として尊ぶ心でございます。——とヨセフは答へた。

——お二人はイエスの教への正しさ、美しさを認め、人としても正しい立派なものと思つながら、それを實生活に受け容れぬとは……一體お二人の言葉の眞實は何處にあるのやら。

ヨセフは黙り込んでゐた。ピラトは長いこと返事を待つたが、その顔は嘲むやうな薄笑ひを浮べて昂然としてゐた。散々二人を愚弄した擧句、無造作な調子で訊いた。

——さて一體なにの御用でしたかな。

——ほかでもありません、あの豫言者の記憶に對して相應の尊敬を拂つて貰ひ、彼の亡骸を父祖傳來の儀式通りに葬りたいのでございます。——感激のこゝろを表はしてヨセフは答へた。

——たゞそれだけのことかな？——とピラトは冷やかに訊ねた。

やがてピラトは白い肥えた片手を上げると、また無造作な様子でその手をおろして、云つた。

——その死骸を引き取つて、勝手にどうともされたがよい。

かう云ひ捨て、早急にくるりと踵を轉じ、ヨセフ兄弟を見返らうともせず、さつさと出て行つた。

迎へるやうにさつと開かれた帷の彼方は、酒宴の灯火の照り映える光の海、ピラトの歸りを

迎へる黄金の酒杯の閃き、甘い慾情をそよるやうに渦まく女の裸身などが、兄弟の眼に入つた。

暗い帷は徐かに下りて、一時に何も彼も消え去つた。聞えるものはたゞタムブーラと豎琴の

音、熟情的な甲高い笛のひびき、生の歡びに酔ひしれた人ごゑ、輕々と踊り狂ふ素足のひたひたと床を踏む音！

ヨセフと弟ヤコブとは、己れの權勢に思ひ上つた傲慢な羅馬の代官を低い聲で罵り合つた。

そして勝ち誇つたやうな悦びに胸を震はせながら、師の亡骸を埋める地を祖先の碑の間に設けようと、我が家の墓地をさして急いだ……

革命前期のロシア文學者の中には、眞に優れた才能として私の愛する作家詩人が尠くない。アンドレイ、ペールイ、ブローク、レーミゾフ、ブーニン、ザイツェフ、アルツイバーシエフ等がそれである。

その中でもアルツイバーシエフは實にも不可思議な藝術家である。彼は何よりも先づ『サーニン』の作者として知られてゐる。人も知る如く大膽に本能の解放を主張した『サーニン』は、當時青年の聖書と呼ばれたものであるが、しかし『サーニン』の中にはそれほど深い思想的眞理が蔵されてゐるか？ 否、藝術的形象としてのサーニンは戀愛の超人の域には遙かに遠いのみならず、彼の説く本能哲學にも高邁な思想の飛躍と見るべきものは皆無で、却つて淺薄な凡俗的臭味が横溢してゐる。又、彼の藝術の集大成ともいふべき『最後の一線』は、この人生を無意味な苦痛と、醜い倦怠の連続と見て、世界の絶滅を企圖する狂暴な宣言書であり、逆語的

に云へば「無への創造」である。要するにアルツイバーシエフの藝術は矛盾と缺陷だらけなのである。

しかし矛盾と缺陷の存在は必ずしも作品そのものゝ價値の否定にはならない。それどころか時としては矛盾と缺陷だらけであつて、尙かつ偉大な藝術たるを失はない例さへ屢々ある。ドストエーフスキイなどその最も顯著なものと云ふことが出来る。ドストエーフスキイの場合では、その偉大な悲劇的精神と藝術的辯證法が一切の短所を蔽ひ盡すばかりの燦然たる輝きを放つてゐる。アルツイバーシエフにあつては、彼の自然と人間に對する深い愛と、それから生じた鋭い感受性と、逞ましく新鮮な描寫が、思想的矛盾を壓倒するに足る程の力をもつてゐるのである。寧ろ、彼の死に對する恐怖、死滅に終る生への呪咀は、畢竟生活愛の變形したものに過ぎず、生への呪咀が烈しくなればなる程、それに正比例して彼の生活本能は赤熱して行つたのである。有名なアルツイバーシエフの女性憎惡主義アンチフェミニズムも全くそれと同様に、彼の異性に對する執着の深さを示すバロメータアであつたと云へよう。

こゝに收めた短篇はアルツイバーシエフの作品中もつとも傑出したものを、システマテイクに集めたとは云ひ難いけれど、彼の藝術の種々なる時代と面とを窺ふに好都合な一つの系列をなしてゐる。『血痕』は一九〇四—五年の革命を描いた初期の短篇の中で代表的なものであ

り、『ある平手打ちの話』と『嫉妬について』は彼の反女性主義を盛つた典型的なものであり、『木偶』はアルツイパーシェフ獨特の自然描寫を遺憾なく味はゞせてくれると同時に、彼の虚無的の人生觀の一端を洩らしてゐる。『アリマタヤの兄弟』は、革命前のロシア文學の一傾向であつたエキゾチズムに資を捧げたもので、アルツイパーシェフとしては異色ある作品である。序でながら、この『アリマタヤの兄弟』は、『ある平手打ちの話』『嫉妬について』『木偶』と共に彼の圓熟期（一九一〇—一九二〇）に屬してゐるにも拘らず、眞正面から生活肯定の態度を露出してゐるところは注目に價する。

尙、この作家について比較的詳しいことは、拙譯『最後の一線』の解題に述べて置いたから、参照して貰へれば幸甚である。

譯者

昭和二十二年六月十日 初版印刷  
昭和二十二年六月二十日 初版發行

著者

よかお  
川正夫

發行者

入坂淺太郎  
東京都杉並區西荻窪一ノ一五

印刷者

中内佐光  
東京千代田飯田町

配給元

日本出版配給株式會社  
東京千代田淡路町



製本・印刷

發行所

東京都千代田區神田駿河臺  
會員番號A一一一〇二八  
電話神田一〇六七五〇二

弘文堂書房

定價貳拾五圓

25545  
—  
C



F83

A79-2

終

